

「うちゅう」500号

月刊「うちゅう」が創刊されたのは、今から41年前、1984年4月のことでした。当時は大阪市立電気科学館の時代で、「うちゅう」は「星の友の会」発足とともにその会誌として発刊されました。「うちゅう」は今回発行号で500号となります。そこで100号ごとに、500号までの道のりを振り返ってみます。

「うちゅう」500号のあゆみ

【創刊号】1984年4月

メイン記事「ハレー彗星はどこから来たか」2年後の1986年にハレー彗星が回帰する予定であることから、彗星の起源に迫ることができるのではないかと期待が込められた記事でした。編集後記では、うちゅうに掲載する記事について「天文学の動きをハード（観測機器等）とソフト（成果）の面からとらえたい」と豊富が述べられています。

○1984年の出来事

- ・オゾンホールが発見報告
- ・NHKが衛星放送を開始



大阪市立電気科学館 星の友の会

【100号】1992年7月

記念号として、電気科学館友の会評議員の皆様方から寄せられた原稿が掲載されています。「非ノイマン、非線形、非一様の世界」と題する記事では、コンピュータで計算される世界と現実世界の間の違いなどについて解説されています。

○1992年の出来事

- ・宇宙飛行士毛利衛さんがスペースシャトルに搭乗し宇宙へ
- ・宇宙マイクロ波背景放射のゆらぎの発見



大阪市立科学館 星の友の会

【200号】2000年11月

メイン記事「電波望遠鏡で星の誕生を探る」分子雲の電波観測による星形成の様子や、近く設置されるASTE望遠鏡、計画中のALMA望遠鏡について解説いただきました。また、200号に寄せられたメッセージも掲載しています。

○2000年の出来事

- ・白川英樹博士がノーベル化学賞を受賞
- ・カメラ付き携帯電話発売



大阪市立科学館 星の友の会

【300号】2009年3月

メイン記事『『自発的対称性の破れ』と南部理論』前年の2008年に南部陽一郎博士がノーベル賞を受賞したことにちなみ、南部理論の解説記事を掲載しました。

○2009年の出来事

- ・世界天文年、日本の南西諸島で皆既日食
- ・国際宇宙ステーションで、日本が担当する実験棟「きぼう」が完成



【400号】2017年7月

メイン記事「重力波天体の可視光・赤外線観測」重力波望遠鏡で観測された天体を、可視光・赤外線望遠鏡でとらえるための取り組みについて解説いただきました。また、「うちゅう」のロゴなどをデザインいただいた岩崎寛都彰さんにご寄稿いただきました。

○2017年の出来事

- ・重力波の検出がノーベル物理学賞を受賞
- ・囲碁AIの「AlphaGo」が、囲碁トップ棋士に勝利



【500号】2025年11月

メイン記事「ジェイムズ・ウェッブ宇宙望遠鏡：宇宙のはじまりを探る冒険」最新の宇宙望遠鏡によって明らかになってきた、宇宙最初の星や銀河をめぐる最先端の研究の様子を解説いただきました。

○2025年の出来事

- ・坂口志文博士がノーベル生理学・医学賞を、北川進博士がノーベル化学賞を受賞／・大阪・関西万博開催



もう一つの友の会冊子「サイエンス友の会ニュース」

1996年、既に発足していた「星の友の会」に習い、科学に親しむための組織として「サイエンス友の会」が発足しました。「サイエンス友の会ニュース」は、この会誌として発行された冊子です。A4サイズの12ページで、1996年4月から1998年2月までの2年間、隔月で計12号発行されました。

「素粒子物理学と大阪」「半導体半世紀」などの専門記事や、「ドキドキ実験室」と題した科学実験の記事などが掲載されました。

1998年4月に星の友の会とサイエンス友の会が合併し科学館友の会となりました。それに合わせて、「うちゅう」も天文学だけでなく、物理・化学などの分野も扱う科学の総合的な冊子となりました。



江越 航(科学館学芸員)